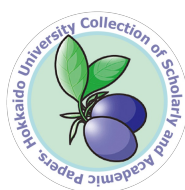




Title	「生きづらさ」探究活動についての検討におけるA. W. グールドナー理論の有効性
Author(s)	藤川, 奈月
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 138, 329-357
Issue Date	2021-06-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.138.329
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82165
Type	departmental bulletin paper
File Information	20-1882-1669-138.pdf



「生きづらさ」探究活動についての検討における A. W. グールドナー理論の有効性

藤 川 奈 月*

【要旨】 現在,「生きづらさ」という言葉が包括的で多義性を持つ言葉として様々な人の間で使われている。にもかかわらず,専門家による「生きづらさ」の定義付けや理論構築などといった「生きづらさ」探究活動には,多種多様な「生きづらさ」のうちの一部しか反映されていない。本論文は,この現象の構造とそれを乗り越える方途の検討においてA. W. グールドナーの理論を援用することの意義と限界を探るものである。グールドナーの理論を再読し整理した結果,先述の現象の構造は,グールドナーの下部構造論の援用,すなわち,専門家とそれを取り巻く社会や人々との間の相互作用の検討によって説明可能となることが明らかになった。先述の現象を乗り越えるための方途については,グールドナーのRational Discourse論,特に,「知的対話」「限界の自覚」「非権威的理性」「明識としての知」がその一助となるものの,グールドナーの理論だけでは限界もあるということが明らかになった。

【キーワード】 グールドナー, 下部構造, Rational Discourse, 生きづらさ, 専門家

1. 問題の所在と研究目的

現在,「生きづらさ」という言葉が社会に浸透している。この言葉は,多種多様な苦しみを「日常語で表す手段」(貴戸 2014)として様々な人によって使われているように,誰もが使えるという包括性,多義性を持っている¹。そうした中で,支援実践者や研究者,社会活動家,発信者といった専門家たち²が,それぞれの専門分野を基盤として,「生きづらさ」の理解,定義付け,理論構築,克服方法の提示などを行っている³。これら「生きづらさ」探究活動は有益であり大切なものである。探究活動により何かを明らかにできれば,それを取っ掛かりとして「生きづらさ」を見ることができるようになり,何らかの改善に向かい得るからだ。

ただ,ここで気になるのは,そのような活動に反映されているのが「生きづらさ」の一部で

* 北海道大学大学院教育学院修士課程修了

¹ 「生きづらさ」という言葉の系譜については,筆者の平成30年度卒業論文「「生きづらさ」という言葉を用いて何がいかん語られてきたか」にて分析している。

² ここに挙げた人々以外にも専門家と呼べる人々はいる。そのような「専門家」の幅広さを把握しつつも,今回は,一般的に専門家とみなされうるこれらの人々を想定する。

³ 研究や実践の現場における「生きづらさ」言説やこれまで行われてきた「生きづらさ」探究活動については,筆者の令和2年度修士論文「他者の「生きづらさ」を探究する専門家についての考察: A. W. グールドナーを手がかりに」にて整理している。

あろうという点だ。例えば近年、「子どもの『生きづらさ』を理解しよう」という場面では、「生きづらさ」の原因がそれだけでないかもしれないにもかかわらず、「発達障害」というテーマを掲げる傾向がある。確かに、子どもの「生きづらさ」を捉えるための枠組みとして「発達障害」という概念を使うことが有益なときもある。しかしここには、「発達障害」に着目するあまりに、「発達障害」こそが「生きづらさ」であるとして、「発達障害」以外の「生きづらさ」を見落としてしまう危険性もある⁴。

このことは次のような問題点を抱える。第一に、「生きづらい」本人が、混乱をもたらされたり自分の状態を表す言葉を奪われたりする危険性がある点だ。一部の「生きづらさ」のみを反映した探究成果が「生きづらさ」として公表されることは、「生きづらい」本人が探究成果としての「生きづらさ」と自分の「生きづらさ」との間の差異に混乱することにつながりかねない。また、「生きづらい」本人が「自分の『生きづらさ』は『生きづらさ』ではない」「あなたの『生きづらさ』は『生きづらさ』ではない」とみなす／みなされることにもつながりかねず、「生きづらい」誰かが、誰もが使えるはずの「生きづらい」という言葉を奪われる危険性がある。第二に、「生きづらい」本人やその人を支えようとする人が、「生きづらい」人の「生きづらさ」を把握・改善できなくなる危険性がある点だ。「生きづらさ」を特定の「生きづらさ」の枠組みのみに依拠して片付けることは、複雑な「生きづらさ」の把握・改善を遠ざける危険性を孕む。

したがって、「生きづらさ」探究活動について、次の問いを検討する必要がある。すなわち、「生きづらさ」の一部しか探究活動に反映されないという現象はどのようにして起こっているのか。そして、この現象を乗り越え、今よりも少しでも多くの「生きづらさ」を探究活動に掘り取るためには、いかなる方途があるのか。

ここで注目に値するのは、クレーム申し立てについて論じた草柳千早（社会学者）による、ある語りがクレームとして社会問題化されない状況に対する考察である。草柳(2004)は、「語り手が自らの語りをクレームとして強調しない」ということを観察し記述することは、「語れない」という事態に言及する当事者の語りを参照すること、あるいは、直接の対象の外部を参照することによって可能となると言う。そして、「そこに何かがない、という観察を可能にするのは、対象の外部との『比較』『参照』であり、そうした手続きを可能にするのは、広義に言って、そこにはないもの、あるべきもの、あってよいはずのもの、についての、分析者・観察者の『知識』であろう」と述べる。これを本論文の問題関心に即して言えば、見えにくい「生

⁴ このような現象は、「生きづらさ」を定義しようと試みる人たちの論考でも起きている。例として、生活者を「生きづらく」させる様々な諸相を解明しようと研究を行う神原文子（社会学者）による「生きづらさ」定義を挙げておく。神原（2011）は「生きづらさ」を「①生活者が組み立てる生活システムにおいて、達成が期待される生活課題のいずれかが充足できなくなり、自らの生活システムを変えてもなお生活課題が達成されなかったり、生活課題が許容化できるように生活システムを変えようとしても、なんらかの障害があって変えることができなかったりして、当の生活システムが非許容・均衡状況と認知される時の体験、および、②生活システムにおいて、生活諸課題が許容状態にあっても、その許容状態を維持することがもはや限界に達しており、もうこれ以上持ちこたえることが困難な均衡状態にある時の体験である」と定義している。だがここでは、自己の生活課題をある程度達成・維持できている人であっても何らかの「生きづらさ」を感じる可能性があるという場合が考慮に入れられていない。そのような人の漠然とした「生きづらさ」が、「生活者を『生きづらく』させる様々な諸相を解明しよう」とする研究から見落とされるのは不適当に思われる。

きづらさ」や認識しづらい「生きづらさ」を探究することは、その存在に対する専門家の「知識」のもと、そこにあるであろう「生きづらさ」とそれを取り巻く現状とを見比べることによって可能となる、ということになる。このことから、「生きづらさ」の探究が不十分であるという現状とその改善策を考えるときには、専門家の「知識」に注目することが有効だということが推察される。

専門家と呼べるような人々の知のありようを研究してきた人たちの中に、社会学者のA. W. ゲールドナーがいる。ゲールドナーは、人の準理論的な諸信念、感情、経験、社会構造や文化構造から受けている影響などを総じて「下部構造」と呼び、社会理論家が自身のそれを省察する「自己反省の社会学」を提起した。また、その第一歩として、Rational Discourseの重要性を述べた。これらのゲールドナーの理論は、知を構築する現代の実践とも接続可能性を持っており、「生きづらさ」探究活動についての検討の手がかりになると考えられる。

以上のことから、本論文は、「生きづらさ」探究活動の不十分さとその改善策の検討におけるゲールドナー理論の可能性と限界を探ることを目的とする。そのために、まず、ゲールドナーの概要を踏まえたうえで、ゲールドナーの理論を整理する。そして、それを援用して専門家による「生きづらさ」探究活動を読み解き、「生きづらさ」探究活動の検討にゲールドナー理論を援用することの意義と課題を明らかにする。

本論文におけるゲールドナー理論の整理は、以下の資料を用いて行う。

- ゲールドナーの初期の論文“Metaphysical pathos and the theory of bureaucracy” (1955) の翻訳である「形而上パトスと官僚制理論」。この日本語訳は、ゲールドナーの出世作である“Patterns of industrial bureaucracy” (1954) の訳書『産業における官僚制』（岡本秀昭・塩原勉訳、経済雑誌ダイヤモンド社、1963年）に収録されている。
- ゲールドナーの代表作“*The coming crisis of Western sociology*” (1970) の訳書である『社会学の再生を求めて』（岡田直之・田中義久ほか訳、新曜社、1974年～1975年、全3巻）。日本語で原著名は『西欧社会学に迫り来る危機』と訳されることが多いため、以下、『危機』と呼ぶ。
- 『危機』と密接に関連するゲールドナーの論文やゲールドナーの研究の方向性を示す論文をまとめた“*For sociology: Renewal and critique in sociology today*” (1973) の第一部の訳書である『社会学のために（上）』（村井忠政訳、杉山書店、1987年）。この本には、「反ミノタウロス論」(1962)、「党派人としての社会学者」(1968)、「社会学における追憶と再生」(1971)、「精神の政治学」(1972)、「社会学のために」(1973) が収録されており、その一部はこの本の収録にあたって加筆・修正されている。
- ゲールドナーが「理性」「対話」「知」に関する考察をした“*Enter Plato: Classical Greece and the origins of social theory*” (1965)。
- ゲールドナーがRational Discourseの一形態としてのイデオロギーの可能性と限界を論じた“*The dialectic of ideology and technology: The origins, grammar, and future of ideology*” (1976)。
- ゲールドナーが「新しい階級」（人文系知識人と技術的インテリゲンチヤ）についての一連のテーゼを示した“*The future of intellectuals and the rise of the new class*” (1979) の訳書である『知の資本論：知識人の未来と新しい階級』（原田達訳、新曜社、1988）。この本の「訳者あとがき」で訳者の原田はゲールドナーの経歴と著作リストを挙げ

ており、本論文の2.1のいくらかはこれに拠った。

なお、英語文献から本稿に直接引用した箇所の日本語訳はすべて筆者による。

2. グールドナー概説

2.1. グールドナーの足跡

グールドナーは、1920年、ニューヨークのマンハッタンに生まれた。

ニューヨーク市立バルーク大学でB. B. A. (Bachelor of Business Administration) を取得した後、コロンビア大学で1945年に修士号を、1953年に博士号を取得した。コロンビア大学ではR. K. マートンに師事し、博士論文として『産業における官僚制』と“*Wildcat strike*”を執筆した。『産業における官僚制』は1954年に出版され、グールドナーの出世作となった。グールドナーのリフレクシヴ・プロジェクト（自己反省のプロジェクト）について論じた宮原（1988）は、この頃から既に専門家や知識人⁵の役割に対するグールドナーの強い関心が見示されていると指摘し、この関心が端的に示されているのが「形而上パトスと官僚制理論」（1955=1963）だと述べる。同論文でグールドナーは、当時M. ウェーバーやR. ミヘルスを援用して広く受け入れられていた「官僚制化の必然性」の理論が、社会主義に幻滅したアメリカ知識人に共有された宿命論的な悲観主義のパトスによって支持されており、必ずしも経験的な調査研究による検証によって支持されていたわけではないことを指摘した。このことが、「高度に定式化された社会理論はその背後に感情的な『下部構造』をもち、それ自身からは見えない死角がある」という認識に結びついたのでと宮原は解説している。

グールドナーは、バッファロー大学、アンティオク大学、イリノイ大学アーバナ校で講師や助教授などを務めた後、1950年代後半にワシントン大学に社会学の教授として赴任し、社会学と人類学の合同の学部（what was then the joint sociology and anthropology department）のチェアマンを5年にわたって務めた。その後発表した「反ミノタウロス論：価値自由社会学の神話」（1962）は、M. ウェーバーの「価値自由社会学」に対する社会学者たちの「信仰」を、社会学者という職業集団のイデオロギーの一部として、職業社会学の見地から分析することを試みた論文である。その検討の中でグールドナーは、価値自由という原理は社会学者を自らの価値から自由にしているのではなく社会学者自身の価値を棚上げしているにすぎないということを指摘し、価値自由な社会学というものは存在していないということ、また、存在しえないということを論じた。また、旧来の社会学者たちが「批判的知識人」として社会制度などを批判してきた一方で、このころ新たに現れた「専門職業人」を志向する社会学者が価値自由という原理のもと価値判断を下さない（ように見える）ことによって、社会学は一定の自律性と社会からの支持を得ることができてきたこともグールドナーは指摘した。

1965年出版の著作“*Enter Plato*”は、プラトンを社会理論家と見て検討したものである。この本でグールドナーは、プラトンの生きたその時代だけでなく、プラトンの生きたギリシャに通底し続ける文化や傾向にも焦点を当て、プラトンの理論の考察を進めた。その考察の中

⁵ 宮原は「専門家=知識人」という表現をしているが、両者を等号で結ぶことには慎重にならねばならない。なぜなら、グールドナーはprofessionalsやspecialistsとintellectualsとを区別しているからである。

には、後のグールドナーが下部構造と呼ぶものやRational Discourseと呼ぶものの知的源泉が散見される。

その後、価値自由に関するグールドナーの論考を受けたH. ベッカーが、「社会学者たちにとって、個人的・政治的共感に囚われることなく研究するのは不可能だ」という前提に立ち、自分のとった党派的立場を正直に認めることと、感傷を除去することを、理論における客観性の問題の解決策として提示した。しかし、グールドナーはこれに懐疑を示したということが、「党派人としての社会学者：社会学と福祉国家」（1968）に述べられている。グールドナーによると、党派的立場を正直に認めることは、やらないよりやったほうがいいことではあるが、独り善がりやと単純さを示すものにすぎない。なぜなら、そのような行為は、自らの持つ諸価値が十分に「善きもの」だと決めてかかっているもの、また、自分は自分の価値についてわきまえているのだと決めてかかっているものだからだ。グールドナー（1973=1987）はこうした態度を「自己満足」と呼び、批判する。

そうした中、1970年に出版されたのが『危機』である。『危機』の第一部において、グールドナーは下部構造の概念を提起したうえで、社会学・社会理論の性格や歴史的下部構造、その表明するイデオロギーなどを詳述した。グールドナーはこれらを現在（当時）の社会学を批判的に分析するための序言と位置付け、社会学を社会的に考察することを提起した。『危機』の第二部では、当時の講壇社会学で大きな存在であったT. パーソンズの下部構造を明らかにしながら彼の議論の中に入りこんでいくことで、パーソンズの理論の内部矛盾を指摘した。第三部は、機能主義という側面とマルクス主義という側面を持つ西欧社会学の体系が、激しい葛藤や大きな緊張、高いコストをもたらしながら大きく変化するであろうという「危機」を、中産階級や福祉国家というものとの関連から論じたものである。その中でグールドナーは、当時の講壇社会学の中心的な下部構造はアカデミシャンたちの特殊な経験によって植えつけられ強められてきた抑圧的なものであることや、その下部構造は歴史的な経緯からして持続可能性を持つだろうということを看破した⁶。それと同時に、当時講壇社会学の中で勃興してきていたラディカル社会学が解放的な潜在能力を持っていることを指摘し、当時の講壇社会学がその政治的かつイデオロギー的性格において、抑圧的な側面と解放的な側面とを共に有しているということを主張した。機能主義が社会秩序（社会体系の安定性）を重視するのに対し、ラディカル社会学は社会変革を重視し実践にコミットする。グールドナーは、人が社会をつくるという認識のもと理論と実践を循環するラディカル社会学の発展の余地を増大させることを期待した。そして、『危機』の第四部において、グールドナーは「自己反省の社会学」（Reflexive Sociology）を提唱する。自己反省の社会学とは、当時アメリカで関心が持たれてきていた「社会学の社会学」の構想の一つであり、「理論はひとの全体を通して人間によってつくられる」という仮説からスタートしてこの仮説を真剣に追究するものである。端的に言えば、社会学者たちが社会学者自らの理論の下部構造をも見つめ直す社会学である。

⁶ グールドナーは機能主義の下部構造をプラトンの理論の下部構造と比較することで、機能主義の下部構造は近代的な産業社会にのみ固有のものではなく、古くからあるものの適応能力の結果として形づくられたことを証明している。例えば、プラトン理論と機能主義理論の共通点として、社会変動でなく社会秩序にとっての必要と戦略に照準を当てている点や、社会を「人間を超えた何か」とであるとみなす点、人間は社会内で共有されている価値に同調するものだと考える点などを挙げている（Gouldner 1970=1975）。

『危機』が出版されたころのアメリカについて、中野（1988）は、「倫理的な側面でいえば、軍事や政治への社会学・人類学の『協力』は悪との不毛な野合でしかなかったことが、認識論の側面でいえば、アメリカ的自己中心主義（ethnocentrism）が異文化の行為、構造、意味を歪曲して理解していたということが、それぞれ反省され、政治学、人類学、社会心理学、社会学の表舞台で、行動科学主義（behavioral approach）と機能分析（functional analysis）に対するおおびらな弾劾が続いた」と論じている。柳原（1988）は、この時期に社会学に現れた動きを「理性不信や科学不信の動き」と表現し、「近代化が人間の解放を導くという幻想が支持されなくなったことのひとつのあらわれであり、解放へのメディアであったはずの科学が、抑圧へのメディアでもあったことの社会的認知の結果でもあった」と述べている。中野（1988）は、この状況の中で注目に値する書物の一つとしてグールドナーの『危機』を挙げている。柳原（1988）も、社会学にまつわる様々な「危機」説の「ブームの火付け役」としてグールドナーを取り上げている。馬場（1972）は、「社会学の社会学」という傾向がアメリカ社会学界に反響をもたらしていたことについて、1970年代に「社会学の社会学」に関する本がグールドナーの著作に次いで少なくとも3冊出版されていることを確認している。グールドナーの社会学運動を「基本的には正しい方向性を持ったものと評価されなければならない」と評する矢沢（1979）は、アメリカでは1950年代末頃から「社会学の社会学」が徐々に人々の関心をひくようになっていたと言い、それには次のような文脈があったとする。第一に、1950年代末以降、アメリカ資本主義の危機が表面化し始めたことで噴出した多くの社会問題に社会学者が取り組む過程で、「価値自由」社会学への疑念や「社会学とは何か」という問いが発せられるようになったこと。そこでは、知識人・生活者・社会学者としての自己の分析や、自分たちの生活・制度・職業・理論の再吟味から再出発する道がとられた。第二に、社会学が専門職業化並びに制度化されたこと。そこでは、社会学を専門職業・制度それ自体として問題にして分析することが必要不可欠になった⁷。以上のような潮流や、ラディカル社会学の勃興という時代性が、グールドナーによる『危機』の理論と密接に関係していると考えられる。

グールドナーによれば、『危機』の出版後、“*American Journal of Sociology*”において少なくとも2回『危機』批判が行われた。R. フラックスとA. トウレーヌ、M. ツァイトリンが『危機』の書評を行った時（1971年）と、S. M. リプセットとE. ラッドが中心となり『危機』への反論そしてラディカル社会学への批判を行った時（1972年）だ。

グールドナーは「精神の政治学」（1972）において、『危機』へのR. フラックス、A. トウレーヌ、M. ツァイトリンによる批評を取り上げながら五つの基本的な争点について議論を深めようと試みている。五つの争点とは、①「グールドナーは一貫性のある代替モデルを提示できていない」という点、②「本当に必要なのは社会の批判なのに、なぜ社会学だけを批判するのか」という点、③マルクス主義への言及が不足している点、④「社会学が、世界や実践、現在を乗り越え人々を解放する努力に対していかなる関係にあるのか」という点、⑤「たん

⁷ ただし、グールドナー（1973=1987）によれば、価値自由社会学が社会学の専門職化（professionalization）を推し進めていたことが、社会学者の自己反省をより困難にさせていた。なぜなら、専門職（profession）には自分たちの社会の広範な文化や制度を所与のものとして受けとめる傾向があるからである。加えて、自らをスペシャリストないしプロフェッショナルとみなす社会理論家は、「理論」という自分の活動領域でテクニクを駆使するだけで十分であるという観念、思考・哲学なしに社会学という知的学問をすることができるという「浅薄な」信念を持つ。このことも、社会理論家の自己反省を困難にさせていた。

なるイデオロギーと真の社会科学との間の境界を踏み外すか、それを不明瞭なものにしてしまうのではないか」という点である。グールドナーはまず、②について、社会を批判することと理論を批判することは切り離せないということと、自己反省の社会学を社会学の研究だけに限定するつもりはないということを述べる。次に③について、マルクス主義については別の機会に論じると明記していたこと、とはいえ『危機』でも実際にはマルクス主義のことをかなり論じていることを述べる。そして、⑤について、両者を区別すること自体が知識や客観性というものに関する暗黙のイデオロギーに支えられているということを指摘する。④については、社会学者とは何者であるのか、その職務は何なのか、運動との関係はいかなるものなのか、といったことについてもう一度明確化する必要があると述べ、「フラックスはこのような関係について具体的かつ明確な見解を実践に基づき提示しており大いに注目の価値がある」と指摘している。最後に、①について、「代替理論やポジティブな立場をやみくもに主張しては方法論的ユートピア主義になる」という見解から、「むしろ決定的に大切なことは、多種多様な知的代替案、新たな専門のパラダイム、新たな中範囲の理論、新たな認識論といったものを涵養することが可能になるような人間的諸条件—下部構造—を確立すること」だと主張する。ここでグールドナーは、自身の持つ仮説について、第一に、今日のあらゆる社会学者が直面している問題は理論と実践のあいだの相互関係であるということ、第二に、理論と実践という循環に入る最良の方法は、コミュニティ、とりわけ新しい理論集団を創出することだと述べている。

「社会学のために」(1973)は、S. M. リブセットとE. ラッドを中心に行われている批判に対応した論文である。彼らは、①パーソンズの機能主義が社会学において優位に立っている(支配的な理論的立場である)というグールドナーの主張への反論、②パーソンズがイデオロギー的には保守主義であるというグールドナーの主張への反論、を行っている。だが、グールドナーはそれらの反論に対して、その反論の根拠として挙げられているものが誤っていることや矛盾していること、批判者の考えもグールドナーの論と同じ結論になることを指摘した。

その後発表された“The dialectic of ideology and technology”(1976)、『知の資本論』(1979)、“The two Marxisms: Contradictions and anomalies in the development of theory”(1980)は「The dark side of dialectic」という共通のタイトルを持つ三部作である。それまで社会学(とりわけ講壇社会学)を自己反省的に検討し論じてきたグールドナーが、今度はこの三部作で、社会学と対立してきたマルクス主義を自己反省的に検討し論じた。以上のような自己反省的研究は、自身を「半分社会学者、半分マルクス主義者」、「ヘーゲル左派社会学者」、「マルクス主義者のアウトロー」(Gouldner 1976)と称するグールドナーならではの成果であると言えると同時に、自分の依拠する理論的基盤を自ら掘り崩す危うい作業でもあったと言える。

グールドナーの足跡をたどるにあたっては、論文・著書だけでなく、雑誌の刊行にも触れておく必要がある。彼の著作で論じているように、グールドナーは、知的共同体の意義を強く感じていた。その「共同体」づくりの一つとして、1963年にI. L. ホロヴィッツと共同で“Trans-Action”という雑誌を、1974年に“Theory and Society”という雑誌を創刊・編集した。

グールドナーは、1980年、講演先のマドリッドにて心臓発作で亡くなった。彼の死を報じる新聞記事(New York Times 1981. 01. 10 “ALVIN GOULDNER, 60, A RADICAL SOCIOLOGIST, DIES OF HEART ATTACK: [obituary]”)は、グールドナーを、「多くの作

品を書き、米国および海外で広く講演し、同僚の間で大きな論争を巻き起こした、型破りでラディカルな活動家だった」と評している。

2.2. グールドナーに関する日本の研究

次に、グールドナー及び彼の理論が日本でどのように論じられてきたかを整理する。

「グールドナー」「ゴルドナー」を冠する論文の題目及び収録雑誌を概観すると、グールドナーは主に社会学の領域で注目されてきたということがわかる。また、グールドナーが著作を発表してすぐにその論考が注目されてきたこともわかる。これにしたがい、日本におけるグールドナーに関する論文の内容は、初期は官僚制・組織論に関するもの、後期は自己反省の社会学に関するものの割合が大きくなっている。これらのうちのいくつかを参照したところ、グールドナーの著作及び理論を読解する論文や、グールドナーの著作及び理論を踏まえて「社会学」や「社会学者」について論じる論文が見られた。例えば、前者には矢沢（1979）や宮原（1988）、後者には馬場（1972）や保田（1999）を挙げることができる。この中で、本論文の内容との関係で特筆しておくべき論文は、宮原浩二郎（社会学者）による「リフレクシヴ・プロジェクト: A. W. グールドナー再考」（1988）である。この論文は、グールドナーの著作の詳細な検討を通じてリフレクシヴ・プロジェクトの意味をつかみ、グールドナー像を再検討することを試みたものである。宮原は、それまでのグールドナーの評価について、「全体像が明確にされず、しばしば分裂したイメージが放置されてきた」点、「政治的なイデオロギー批判や社会学者の道徳的な〈自己反省〉と同一視され、『情念過剰気味の』政治的、外在的な現状告白にすぎないとして批判されてきた」点、「『危機』以降の主要著作が十分に検討されていない」点の3点を問題視し、検討を進めた。この論文の最後は、「グールドナーの適切な位置づけは、組織論、パーソンズ機能主義批判、マルキシズム批判、知識人論に通底する、彼の批判的議論の質に注目してはじめて可能になる」ということを確認して結ばれている。本論文が注目するのも、宮原の言うところの「彼の批判的議論の質」である。

『現代アメリカの社会学理論』（新睦人・三沢謙一編）において、1950年以降の機能主義社会学についてまとめている中野（1988）は、グールドナーと「正統派社会学」者との議論のやり取りを概観したうえで、「論争の激しさにもかかわらず、その成果については若干の疑問が残る」と述べ、「論争ではイデオロギー的な議論が前面に立って、理論仮説に関する具体的・特殊的な貢献が実り多いものであったとは思われない」と結論付けている。これについて中野は、グールドナーの自己反省の社会学が「方法論としてどのような具体性を持ち得るかが明確でないこととも関連しよう」と指摘する。これに似た指摘は他の論者によってもなされている。例えば宮原（1988）は、「グールドナーの提示しえた解決策は、同時に複数の言語や理論に精通することで、特定の言語や理論をそのつど対象化することであった」ことに触れながらも、グールドナーの「近代理性によって近代理性を批判するという理論の自己回帰的批判の徹底」は、「影踏みにも似た不可能な作業であり、結局のところ彼はこの連鎖から抜け出れなかった」ともいふべきだと述べる。柳原（1988）は、「グールドナーは、現代の悲劇から生じるパトスを広く共有されうる新たなロゴスへと結晶させていく方法については語らなかった」と言い、グールドナーによる「現代の社会と社会学の危機のありか（≡社会的功利主義と技術的客観主義）」の問題提起を受けた我々の次なる課題は、「受難の時代の情念というなかばカオス状態の人間的自然を自覚しつつ、それを受難からの逃走や暴走へとつなぐの

はなく、受難を解き放つ新たなロゴス（≡認識の原理、ことば）へとつないでいくという作業であろう」と記している。

以上の先行研究からは、日本では、専門家のありようとグールドナー理論を結びつけて論じる研究がほとんどなされてきておらず、また、グールドナーの研究成果もあまり積極的に評価されてこなかったということがうかがえる。

3. グールドナーの理論

3.1. グールドナーの下部構造論と自己反省の社会学

理論家の「背後仮説」、感情、経験、社会構造や文化構造から受けている影響、理論家にとってリアルであるもの、そしてこれらの事柄が理論家の理論を形作っているそのありかたを、グールドナーは下部構造（infrastructures）と呼ぶ。背後仮説とは、準理論的な諸信念、言い換えれば、世界に対するおぼろげな信念のことである。例えば、世界は一元的か多元のか、人間は「物」のように扱えるかそうでないか、といった信念である。これは、その習得と使用の場である文化によって異なるものであり、最頻的性格すなわち「社会的性格」の変容、社会化の経験や慣習の変化とともに変わるものである。したがって、背後仮説を含む下部構造は、ある程度までは、広汎な文化と社会によって形成・共有されるものである。また、それだけでなく、個人の経験によって個人的に組織づけられ、特徴づけられ、分化され、変容されるものでもある。背後仮説は強力なものであり、たとえ理論家が新しい背後仮説を取り入れたとしても、以前の彼の仮説をすべて捨てるわけではない。新しい背後仮説も理論家のもつ下部構造に同化させていくのである。グールドナーは、いかなる理論も理論家の下部構造に規定されているとする。何らかの事象について、問題を公式化しようとしたり、原因を確定しようとしたりするときだけでなく、ただ諸事象を民族誌的に記述しようとするときにも、その社会学者の下部構造から成る／下部構造を成すイデオロギーや価値観はその記述の中に浸み込む、というのだ。

ある理論が受け容れられるか否か、広まる否か、ということにも下部構造は関わっている。グールドナー（1955=1963）は、当時広く受け入れられていた「官僚制化の必然性」の理論が、アメリカ知識人に共有されたパトスによって支持されており、必ずしも経験的な調査研究による検証によって支持されていたわけではないと指摘した。そして、「ある理論に対してコミットメントがなされるのは、たんにその理論が知的に点検され妥当と認められたがゆえにではなく、むしろ、その理論がその支持者のもつムードや底に潜む感情と合致するがゆえにである」と論じた⁸。要するに、グールドナーによれば、理論の受容や広まりは、その理論の受け手の下部構造に共鳴するか否かにかかっている、ということである。

グールドナーによれば、社会理論はその下部構造との関わり合いによって、理論を定式化した人、受け入れた人の明らかな意図や承認の有無にかかわらず、政治的な意味と含蓄をはらむ。「全ての社会理論は人間の問題についての分析とそれへの治療法を内包している」（Gouldner 1965）のである。したがって、あらゆる社会理論は、個人的理論でもあり同時に、暗黙の政治理論（tacit theory of politics）でもある。つまり、社会理論は社会的世界に関す

⁸ このときグールドナーが参考にしているのは、精神史家であるA. O. ラヴジョイの知見である。

る真理命題であるとともに、社会理論家が戦略的に物事を進めるという行為でもある。

下部構造に対するゲールドナーの強い関心は、彼が「人々がおのれ自身と自分たちの社会的世界とがいかなるものであるかをよりよく理解し話せるような社会」(Gouldner 1973=1987)を目指したことと関係する。ゲールドナーは、そのような社会の中でならば人々は嘘や幻想、虚偽意識といったものなしによりよい生活を送られるかもしれないと考えていた。そうした社会の再建にあたり、ゲールドナーは、人間と社会とがいかなるものであるかについて述べる社会学に意義があると考え、そして、社会学者が自身についても社会的に観察し語る必要があると考えた。なぜなら、知は人の見方や理解すなわち下部構造によっており、「何かを知るということは自分との関係で対象物を見るということであり、これは自分自身を理解するということでもある」(Gouldner 1965)からだ。これが、ゲールドナーの呼ぶところの、社会学を社会的に考察する方法の一つである「自己反省の社会学」であり、下部構造がいかにして社会学者の社会認識を左右するのか、それがいかにして社会理論の生まれ出る源となる人間的な基盤を提供するのかを重視するものである。

ゲールドナーが「自己反省の社会学」と社会の再建とを結び付けているのは、彼が、社会学者は「たんに社会を『研究』しているのではなく、それを概念化し秩序づけている」(Gouldner 1973=1987)という観念を持っているからだ。社会学者たちは、社会的客体および社会的世界を見つめ、考え、語るための方法を提示し案出する一方で、その提示・案出によって社会的客体・社会的世界を構成してもいる。社会学者はただ知識を産み出すだけでなく、言語変革並びに言語創造の仕事に携わっているという点で、新しい文化を創造してもいる。つまり、社会学者個人が彼の下部構造となる社会を形づくっているということである。こういった社会学 - 社会の連関から、ゲールドナーは、社会学の既存の思考様式や理論を批判的に改造し再建することが社会の再建の一部をなすと考えている。この認識のうえに、「社会学者がすべきは、他者に対して社会学者が与える影響を取り除くことではなく、その影響がいかなるものかを知ることだ」というゲールドナーの基本的立場がある。

3.2. Rational Discourse論

社会理論は理論家の持つ下部構造に規定されるが、理論家の理論もその下部構造を成す社会を形づくことに寄与している。この堂々巡りからわずかでも先に進むために理論家自身にできることをゲールドナーが模索し、編み出した理論として、ゲールドナーのRational Discourse論を位置づけることができる。

3.2.1. Rational Discourseという知的対話

ゲールドナー (1973=1987) は、社会的全体性の理論的分析には、異なった様々な専門における経験を積んだ人々からなるRational Discourseが可能なコミュニティにおいて、哲学、歴史学、言語学、解釈学などの庇護の下、さまざまな「経験主義的」分野 (various 'empirical' disciplines) を批判的に適用・統合することが必要だと主張する。

ゲールドナーの言うRational Discourseとは、ある主張を正当化する (言論の価値や真理を判断する) プロセスにおいて、話し手の持っているものや社会的地位などといった伝統的な権威を参照せず、提示された議論のみに基づいて自発的に同意を導く言語様式である。換言すれば、それ自体に立脚すること (self-groundness) を強調するという規範を持つ言語様式

である。文脈に依存せず明示的な「意味」に焦点を当てるという性質は、異なった社会的セクターや異なった言語種の話し手がコラボレーションできるようにする機能を有する。このため、Rational Discourseは、それぞれ異なる言語を使う者たち、つまり、異なった下部構造を持つ者どうしの対話を可能にする言語様式なのである。このようなRational Discourseの文法は、日常的な言語様式ではなく、知識階層に特有の技術的で専門的な言語様式であって、伝統的文化の減衰などといった社会文化的条件下で成熟する。その意味で、グールドナーはRational Discourseという形態を「批判的ディスコースの文化（Culture of Critical Discourse, 以下、CCD）」と呼ぶ。文脈依存的な日常的な言語様式とは異なるCCDは、日常の文脈を対象化させることができる。この対象化可能という省察性をグールドナーは重視している。

グールドナーがRational Discourseが可能なコミュニティという集団を推奨するのは、他者が居ることで自己省察が深まるから、また、集団の中では議論すること自体が実践的だからである。前者の点は、グールドナーのプラトン分析を読むと理解しやすい。グールドナー（1965）は、プラトンの知的対話（dialectic）⁹について次のように論じている。知的対話では、人は他者の圧力や監視、批判にさらされることになるため、自分の確立された見解を再調査し、変更するように強いられる。このようにして、かつて自分が持っていた考えを改めたり、自分が正しいと公に認めてきたことを否定したりできる人が、プラトンの言うrationalな人である。グールドナーによるこれらのプラトン理解は、CCDの省察性を重視するグールドナーの考えに影響を与えているとともに、グールドナーが人間と社会とがいかなるものであるかについて述べるためにRational Discourseという対話的形態を提唱することの源泉となっていると考えられる。後者の点については、グールドナー（1965）は次のように述べている。知的対話は、社会理論が孤独な学者による単独の瞑想や読書、研究、厳粛な集まりなどによってのみ発展するということを前提としておらず、社会理論が隣接する学者のコミュニティやローカルな創造性の社会的マトリクスの中の会話（以下、隣接した仲間の会話）に巻き込まれ現れるものだ、ということを前提にしている。そのような前提の中では、新しいアイディアが試験的に公開され、カジュアルに議論され、インフォーマルに洗練される。そして、そこで「考え」は「証明」に飛躍する。これは、人間が、仲間の知的新規性に対する受容性、理解、及び許容度を測定し、新規性をリハーサルして、それ自身を受け入れられるようなものにする「アリーナ」である。隣接した仲間の会話は、「無知な」大衆が排除された場であり、したがって社会理論家たちが従来の価値観の圧から部分的に守られている場であるため、このようにして信念の大きなシステムを実験的に修正することができる。この意味で、グールドナーは、知的対話が実践的であると考え、Rational Discourseを可能にするコミュニティを推奨している。

Rational Discourseが機能するためには条件がある。グールドナーによれば、それは、議論する者たちが相対的に高いレベルの教養を持っていること、議論する者たちがコミュニティの制裁や政治的報復を気にせず自由に発言できること、議論に無関係な地位の違いや配慮を無視できる社会的平等があること、である。特に、コミュニティが「力」（forceとpower）の排除された解放的な社会的空間であることの必要性は、聞き手が話し手の仮定について質問

⁹ 日本では「問答法」や「弁証法」と訳されることが多いが、本論文は、この言葉に哲学的専門的技法という印象を付与しないようにするために、「知的対話」と訳す。

したり批判したりする権利の中でこそ省察が保障される、という点から強く論じられている。

Rational Discourseの担い手としてゲールドナーが想定していたのは、CCDを身に付けている人々である。ゲールドナー（1979=1988）は彼らを「新しい階級」と呼ぶ¹⁰。「新しい階級」たりうる人々の範囲については、ゲールドナー（1976）がRational Discourseの一形態としてのイデオロギーについて論じている記述からうかがうことができる。ゲールドナーによれば、社会科学の実証主義¹¹ではパブリックイシューも「技術の問題」「科学の問題」として社会学者という技術的資格を持つ者によって解決されるべきだとみなされるのに対して、Rational Discourseの一形態であるイデオロギーは、人間の利益と彼らの理性の共通の所持に基づいて、すべての人々に開かれた場を維持する。この対比に従えば、Rational Discourseは、何らかの技術的資格を持った特別な人間だけが担えるというものではなく、すべての人々が担える可能性を持っているものであるということがわかる。加えて、ゲールドナーは、公教育システムや印刷技術による知的活動の世俗化によって「新しい階級」が広まるということも論じている。子どもたちを家庭から切り離し学校で教師の教育を受けさせることは、子どもたちを日常生活の言語から切り離し、CCDへ赴かせる作業となる¹²。また、図書や雑誌、新聞などといった印刷物も、提示される言葉のみによるコミュニケーションを進めるという意味で「新しい階級」を拡大させてきた。これらのことを総合すれば、ゲールドナーはすべての人々が「新しい階級」となりうると考えていたということが明らかになる。

3.2.2. 「非権威的理性」と「明識としての知」という要点

Rational Discourse論で注目すべきことのひとつとして、「Rational(ity)」の性質を取り上げておきたい。Rational Discourseの「Rational(ity)」は、直観や想像力、洞察などといったものにも価値を置き、受動的側面・解放的側面を持つ、非権威的理性である。このことは、ゲールドナー（1965）によるプラトン分析を通じて理解される。

¹⁰ 金銭的資本で支配する権威主義的な旧階級に対して「新しい階級」と呼んでいる。「新しい階級」は、CCDによって物事をラディカルに捉える傾向を持っていることや、収入及び権力の小ささと文化資本及び自尊心の大きさととのバランスが不均衡であること、自分たちの利益だけでなく社会全体への関与を志向することなどから、旧階級の権威から離反するという特徴を持っている。その意味で、「新しい階級」は人間解放にとって最も進歩的な勢力である、とゲールドナーは論じる。しかし、「新しい階級」はCCDを最高のものと信じるがゆえに、CCDを実現・体現している人々に便宜をはかろうとする。このことは、既存の権威を批判するためのCCDによって「新しい階級」が自らを上位に位置付ける新たな権威をかざしかねないという矛盾を意味する。また、「新しい階級」は自己省察性に特徴を持つが、それが硬直する危険性も常に孕んでいる。ゲールドナー（1979=1988）によれば、「新しい階級」は、理論性に価値を置くがために実践の成功にさほど関心を寄せないことや、自己省察の作法様式の重要性を力説するがために状況の相違を無視したり規則へこだわりを見せたりすることから、儀式主義、セクト主義、ドグマ主義に陥る危険性を持つという限界を持っているというのである。また、政治的な観点から見れば、「新しい階級」は脆弱である。状況に拘束されないCCDという言語様式は多種多様な状況が持つ特殊性に対する感受性を鈍らせ、理論至上主義は他者の感情や反応に対する感受性を鈍らせるからである。

¹¹ ゲールドナーによれば、社会科学の実証主義は話し手の存在を隠す客観主義をとるという意味でRational Discourseではない。

¹² たとえ学校制度が「教える」と標榜しているものが社会制度に適合するようなもの（「批判的」でないもの）であったとしても、実際には学校ではCCDが「学ばれる」（Gouldner 1979=1988）。

ゲールドナーは、プラトンにとっての理性は、伝統や慣習によらずに行動や決定を正当化する方法であると言う。これは、先に述べた伝統的権威の非参照及び自発的な同意といった Rational Discourse の要点と共通しており、ゲールドナーがプラトンの理性に関するこの部分を援用して Rational Discourse を論じていることがわかる。

ゲールドナーによれば、プラトンが論じる「rational」は、物事を分類し世界に概念的な秩序を与えるものである。その作業は、知的対話の中で行われ、人が永遠のアイデアや完璧なフォームといった「真実」を心で掴むことにつながる。こうしたプラトン流 rationality を、ゲールドナーは、権威的理性であると述べる。ゲールドナーによれば、権威的理性とは、理性によって社会的合意の強化を図ることで自然界にあるすべての他の要素を習得・支配することを求めるものである。理性こそ善であると考えた権威的理性は、理性以外の要素（感覚や信念など）をすべて疑わしいもの、真理探求をくつがえすものとみなし、真理は、能動的で熱心な努力という知的規律の中で得られるものであると考える。こうした理性観や真理探求姿勢の点で、ゲールドナーは、プラトン流 rationality を権威的理性であると論じている。この権威的理性に対するものとして、ゲールドナーは、非権威的理性を論じている。非権威的理性は、社会的合意や集団の統合に理性を用いようとするのと同じくらい、個人の実現 (individual fulfillment) にも理性を用いようとする。直観や想像力、洞察などといった理性以外の要素も重視する非権威的理性にとって、真理探求は、それが行動的であるのと同じくらい、自己を洞察に開放する受動的な面も持つ。ここで、現代の社会学に関するゲールドナーの考察を参照する。ゲールドナー (1970=1975) は、「社会理論家たちはしばしばある特定の〈事実〉を所与のものに見なす」と言い、社会理論家にとっての重要な争点は、何が事実かという点ではなく、諸事実をどのように秩序立てて配列するかという点、諸事実の意味をどのように位置づけ解釈するかという点であると述べる。こうした理論形成作業は、プラトン流権威的理性と機能を一にする。一方、ゲールドナーの志向する自己反省の社会学は、これとは異なった「もうひとつの理論形成の地平」(Gouldner 1970=1975) に対応している。その理論形成作業は、〈事実〉は所与のものではなく理論家の下部構造に依拠して見出されるものだという仮説から始めるというものである。このこのことを踏まえれば、ゲールドナー流 rationality は、プラトン流 rationality を援用しつつも、それとは違って非権威的理性たろうとしていると考えられる¹³。

ただし、こうしたゲールドナー流 rationality にも矛盾や限界がある。例えば、ゲールドナーは、文脈への非依存性の強調は、そのディスコースが依拠する言語や社会といった文脈についての体系的沈黙を生じさせると論じている。文脈について沈黙するということは、自己省察に限界があるということであり、ゲールドナーはこれを「客観主義と呼ばれる認知的病理」と言う。こうしたゲールドナーの言及に鑑みれば、ゲールドナーの Rational Discourse 論は、rationality 自体の矛盾や限界にも自覚的な rationality を追求するものである、ということが明らかになる。

他にも、Rational Discourse 論で注目すべきこととして、Rational Discourse で求める「知」

¹³ また、脚注10で示した、作法や規則へのこだわりによる省察の硬直や感受性の鈍りに対するゲールドナーの否定的評価について、受動的・解放的であることによってそれらを幾らか免れうると考えられることから、Rational Discourse の「Rational(ity)」は非権威的理性を志向していると読み取れる。

の性質がある。ゲールドナーがRational Discourseでの省察を通じて獲得することを目指す知は、時と共に変化していく人間自身の関心、希望、価値に関わりのある知であり、社会的世界における自分の位置についての人間の明識を高めるような知である。この知を理解するにあたって、ゲールドナーによるプラトン分析が有効である。

ゲールドナー（1965）は、プラトンの語る知が二種類あることを指摘し、両者の特徴をまとめている。一つは、「techne」であり、また一つは「episteme」である。techneとは、情報としての知であり、事実や技術を持っている状態であって、達人や技術者によって獲得・保持される、外部考察的なものである。一方、epistemeとは、明識としての知であり、理解・洞察・価値を持っている状態であって、理論家や哲学者、賢者たちによる知的対話を通じて顕在化（manifest）される、内部考察的なものである。ゲールドナー（1965; 1970=1975）によれば、情報としての知は、物事を単純化して知的構造に当てはめたものであり、人が対象をコントロールすることを容易にするための知であり、伝達可能なものである。これに対し、明識としての知は、人と対象との交感を重視したものであり、物事の複雑さをつかみ描写する知である。これを顕在化させる知的対話は、人間の生や態度、他者との関係、自身の最も深い層を変えるものでもある。知的対話を通じて顕在化される明識としての知は、たんなる理論的真実ではなく、それが価値規範を含み日常的な行動や選択に影響を与えるものでもあるのだ。これらのことから、明識としての知にとっては、社会的世界における真理探求者自身の位置についての理解が重要である。したがって、明識としての知は人が自分自身で獲得し守らなければならないもの、その知を追求し表現する人を離れては存在しえないものである。さらに、ゲールドナーは、明識としての知の特徴として、敵対的な情報にも開かれている状態であることを強調している。理論家が自分にとって敵対的な情報にさらされたときにそれを受け入れ利用することができれば、自己反省によって自己を明らかに認識することが可能となり、その自己認識との関連から社会的世界を認識することができるようになる。つまり、明識は、敵対的な情報を用いることで高まるものである。

情報としての知と明識としての知の違いへの注目、ゲールドナー（1965）が社会学者の役割について論じた部分にも垣間見える。ゲールドナーは社会学者について、既に問題とされていることにに関して社会を診断し情報としての知を生産するだけでなく、問題を改善したり問題とされていない状態からさらに物事を良くしたりする代替案（治療法）の発見・提案も行うべきだと考えている¹⁴。そのために、社会問題の種々の解決策を知覚し、それと戯れ、それを定式化し、楽しませるように習慣的に導く「心の質」が社会学者には必要だとゲールドナーは述べる。これは、社会学者が明識としての知を求めるべきだというゲールドナーの考えを示している。

以上の明識としての知の特徴は「自己反省の社会学」やゲールドナー流rationalityの特徴と

¹⁴ なお、社会学者と社会運動の関係について、ゲールドナー（1973=1987）は次のように述べる。社会学者は、運動がみずからの置かれている状況とまさにその目標としているところを意識するのを手助けする役割を持っている。この役割に従属して、運動に対して多様な形の情報を提供し、その運動に役立つ可能性のある多様な調査研究を行う（あるいは評価する）という役割も持っている。ただし、社会学者は、運動家・社会主義者の革命のマーケット・リサーチャーになるべきではない。彼らが人間解放に寄与していると判断される限りにおいて、また考えうる犠牲と予期せざる結果という困難や危険を承知の上で、彼らの手助けをすべきである。

一致している。したがって、ゲールドナーがRational Discourseを通じて深めようとした／深められると考えた知の形態は、プラトンが知的対話によって顕在化させようとしたepistemeに近いものであり¹⁵、明識であったと考えられる。ゲールドナーのRational Discourse論は、物事の複雑さをつかみ、自己認識を深め、日常的な行動や選択に影響を与える「明識としての知」を志向するものなのである。

4. 「生きづらさ」探究活動への援用

4.1. 下部構造論の援用

3.1で確認したゲールドナーの下部構造論によれば、「生きづらさ」探究活動における「生きづらさ」理論についても、次の仮説が成り立つ。①各専門家による「生きづらさ」理論は、その専門家の下部構造に規定されている。②ある「生きづらさ」理論の広まりは、その理論の受け手の下部構造との関わり合いによる。③「生きづらさ」理論は、「生きづらさ」についての記述であるだけでなく、それ自体が理論家の政治的意図を持つ実践の一つである。④専門家も自身の下部構造となる社会に対して影響を及ぼしている。

これらの仮説に沿って「生きづらさ」探究活動を行う専門家の下部構造を検討すると、以下のようなことが言えると考えられる。

4.1.1. 社会的・時代的背景による制限

第一に、専門家の下部構造の一つである社会的・時代的背景が、探究活動に反映される「生きづらさ」を制限しているということ。この時代の社会的状況を経験し解釈してきたという下部構造を専門家が持っていることが、「生きづらさ」探究活動を狭めているという局面がある。

(ア) 社会的・時代的背景

始めに、「生きづらさ」を探究する専門家の社会的・時代的背景を確認する。

人々の間で「生きづらさ」という言葉の使用が増え始めるのは、1990年代半ばから後半にかけてのことである。この1990年代を、社会学者・文化研究者である毛利嘉孝は、「『不安』の時代」と呼ぶ。毛利(2009)は、「不安」の根幹には不況があったものの、それだけではなく、理由がわからないからこそ「不安」が増大していたと述べる。そして、阪神淡路大震災やオウム事件はその「不安」を助長し、「不安」に抗するように社会全体を詳細に把握・設計・調節する知が要請されたと続けている。この「不安」は、2008年のリーマンショック、2011年の東日本大震災と福島第一原発事故などによって更に助長されてきたと推察され、社会全体を

¹⁵ ただし、ゲールドナーは、プラトンと違い、明識の対象としてアイデアは仮定していないようである。ゲールドナー(1965)は、真の知としてアイデアというただ一つの存在を措定するプラトンの視点では、「自分自身について知っている人は、他者の振る舞いや慣習の研究(社会科学)にはコミットしない」と述べる。なぜなら、皆が同じ知に向かう中では、自分自身を知ることのできた知は、他者にとっての知でもあるたった一つの真実だからだ。このことに着目すれば、ゲールドナーが社会科学に貢献するものとして思い描く知は必ずしもプラトンのそれとは一致しないということがわかる。少なくとも、ゲールドナーの求める知は、アイデアのようなただ一つの何かではないということがわかる。

詳細に把握・設計・調節する知の要請は今も続いていると考えられる。すなわち、「生きづらさ」という言葉が使われ探究されてきた時代は、人々が「不安」に抗するために社会全体を理解しコントロールする「答え」を切望してきた時代であると言える¹⁶。

人々が「不安」に抗する「答え」を求めるときに頼ってきたのが専門家である。小沢牧子(臨床心理学者, 2003)は、人々が問題に手早く決着をつけるための助言または指導そして記号を求めていることの現れが1990年代に強まった「心主義」「心の専門家信仰」だと論じる。助言・指導・記号といった「答え」を与える専門家が重宝されてきたことは、ハウツー本やハウツーセミナーが広く出版、開催されてきたことや、専門家による支援が広くなされてきたことからわかる。比喩としても、言葉通りとしても、専門家による診察、診断名の付与、援助をもって物事を解決しようとする「専門家主義」とも呼べる心性が広く存在してきた。

「専門家主義」の一方で、専門家の知の優位性が感じられなくなっているという面もある。専門家の知の優位性が相対的に低下した原因には、価値観の多元化により専門家の判断が並列化した選択肢の一つに過ぎないとみなされるようになったことなどがあるが、「専門家主義」の傾向に対抗する存在も影響している。それは例えば、障害当事者を中心とした人々による当事者主権の主張や、社会教育的協同実践に関わる人々による対話と省察の重要性の主張といったものである。中でも各方面に大きなインパクトを与えたのは当事者研究であろう。当事者研究は、「障害」や「問題」について語ったりそれを探究したりする権利を専門家から当事者のもとへ取り戻すことを重視している¹⁷。当事者研究では、研究者や実践家、支援者といった専門家も一人の参加者として、あるいは単なるコーディネーターとして、対話に参加する。こうした人たちのように、専門家の中にも専門家主義への批判的見方を持つ人が存在してきた¹⁸。

当事者主権の主張は、個人の問題とみなされてきたものを社会の問題と捉え直す機運をもたらした。「障害」を個人の特質という側面からだけではなく環境の側面も含めて動的に捉える生活機能分類(ICF)をWHOが提示した2001年以降、しんどさや苦しみが個人によるものではなく環境との関わり合いによっているという言説が頻繁に見られるようになった。こうした認識の転換は、「障害」以外のことに関わっても起こっている。日本で「ニート」が話題となり「若者自立・挑戦戦略会議」が開かれ「若者自立・挑戦プラン」が策定された2000年

¹⁶ 土井(2009)は、1980年代半ば以降の消費資本主義社会において価値観が多元化し人間関係が流動化した中では、人間関係の見通しと安定を少しでも良くするために、互いの人格像を単純化して示し合う「キャラ化」という工夫がなされていると論じる。複雑なものを単純化し理解しようとした面からも、人々が「不安」に抗するために「答え」を求めてきた様子がうかがえる。

¹⁷ 当事者研究とは、「障害」や「問題」を抱える当事者が、経験を共有する他者との対話を通じて、自分の「障害」や「問題」、自分自身について「研究」することを指す。当事者研究が生まれたのは2001年、精神障害のある人々の地域活動の場である「浦河べてるの家」でのことであり、その後全国に広がりを見せている。浦河べてるの家は、自分の「障害」や「病気」、「問題」に向き合い、自分の言葉で語ることを重視しており、そこには、医者による定義や説明ではなく自分で自分の体験や状態を説明しようとする、主体性の取り戻しという問題意識がある。そのため、当事者研究では、「専門的な知」の使えるところを取り入れアレンジしながら新たな言葉を紡いでいくことや、いわゆる専門語ではない、日常語や絵図、身体を通じた表現もなされてきた。

¹⁸ また、当事者主体の実践に携わらないまでも、専門家が診断名を与えることに懐疑的な専門家は少なからず存在してきた。なお、そこで批判されてきたことは、専門家の権威性に限らない。

代前半、「ニート」に対して怠けや甘えという批判がなされることがあった。それらの批判に対して、怠けたり甘えたりしているのではなく、既存の社会のいびつさが問題なのだという主張が幾人もの人々によってなされた。このような主張は、2000年代後半のリーマンショックで貧困問題が明るみに出たとき以来、「自己責任論」への反論としても、頻繁に見聞きされる。

1990年代以降の時代的特徴として他に注目すべきことに、成果主義がある。バブル経済崩壊後の日本企業では、人件費の削減や競争による社員の士気向上を目的として、成果主義の人事制度が広まった。成果とそれが生み出された過程を評価するこの制度のもとでは、人々は、成果を出すことと、その成果と過程を分かりやすく示すことが求められる。成果主義は、民間企業に限らず、公的機関でも導入されている。例えば、政府は国立大学を法人化した2004年頃から、学術研究費や国立大学等への運営費交付金の分配をいわゆる「選択と集中」によって行っている。「運営費交付金」を減らす代わりに「競争的資金」を増やすこの政策は、短期的に成果を望めることを分かりやすく説明できることを研究者に求めている。このように、競争という環境の中で成果を分かりやすく示すことの重要性が各方面で高まった。

学問が明確に専門化・細分化されたこともこの時期の特徴である。近代以降、科学技術の発展に伴い学問や知の専門化・細分化が進んできたことは周知の事実であるが、日本でその専門化・細分化が明確となった契機には、1991年の大学設置基準の大綱化がある。同大綱化により大学の開設授業科目の科目区分が廃止され、多様な教育課程が出現するようになったことで、学問や知が名実ともに専門化・細分化することが推し進められたのだ。近年は、専門的な知識・技術だけでは複雑な「問題」に立ち向かえないとして、幅広い教養や多様なものの見方を学ぶ「リベラルアーツ」を重視する動きや、学問の総合化や連携を目指す動きも現れている。これらの動きは、裏を返せば、専門化・細分化がかなりの程度起こっていることを示している。

(イ) 探究活動が制限される局面

上記の社会的・時代的背景を経験し解釈してきたという下部構造を専門家が持っていることによって「生きづらさ」探究活動が狭められている局面は、以下のようなものである。

まず、目の前の「生きづらい」人を支えるという職業的使命・倫理を持った専門家である支援者や臨床家の場合を検討する。上で述べたように、現代は記号・診断名が求められる時代であり、人をその人に付与された記号・診断名で捉えることがなされている。これと同様に「生きづらい」人を「発達障害者」や「セクシュアルマイノリティ」などといったカテゴリーで捉えるような下部構造を支援者・臨床家が持っているとき、そのカテゴリーに共通の「生きづらさ」に注目した探究がなされることになる。この下部構造のもとでは、カテゴリーに共通の「生きづらさ」に注目するあまりにカテゴリー内の多様性が見えにくくなり、個人の「生きづらさ」の全体像が理解されにくくなるという危険性がある。

他方、「生きづらい」人を一人の人間として捉えるような下部構造を持つ支援者や臨床家もいる。この下部構造は、「生きづらい」本人のリアリティに沿うものであり、当事者との信頼関係を形成するのに役立ち、「生きづらい」人の「生きづらさ」の細部や複雑さを捉えることに結びつきうる。しかし、この下部構造のもとでは、目の前の「生きづらい」人の個性を尊重するあまりに、他の人との共通性や社会構造の問題に気づきにくくなるという恐れがある。

「専門主義」や専門化など、専門性が鍵となる状況において、支援者・臨床家が要求される専門性として共感的な姿勢というものがある。しかし、「生きづらさ」を理解しようとして傾聴し語りを収集する中で共感が生じたときには、その共感は、自分の経験や感情、問題意識などといった下部構造に適合する部分を無意識のうちに抽出したうえでのものであったり、それら下部構造に合うように曲解したうえでのものであったりする可能性がある。すなわち、共感の力を持つ専門性という下部構造を持つ専門家だからこそ、相手の「生きづらさ」を理解することを阻まれる恐れがある、ということを描き出せる。

次に、物事を深く調査・分析し新たな知を生み出すことを生業とする学術研究者という専門家の場合を検討する。「専門主義」や専門家の知の優位性の相対的低下、専門化・細分化といった社会的・時代的背景は、学術研究者に対して、研究枠組みを設定するというルールや専門分野に軸足を置くというルール、学術的言語で論じるというルールに則って探究活動を行うことを推し進める。なぜなら、これらのルールは、学術研究者の知見の妥当性や専門性、優位性を示すための正当な手続きだからである。

しかし、枠組み設定という行為には、次のような副次的効果がある。第一に、その枠組みがあたかも自明なものであるかのように感じさせ、枠の内外にまたがるグラデーションを忘れさせてしまう効果。第二に、枠の外側にある存在を相対的に忘れさせていく効果。第三に、枠の内側にあるグラデーションや多様性も見えにくくさせる効果。「生きづらさ」に関して言えば、「生きづらさ」には既存のカテゴリーや概念に依存しないものを表現できるという魅力があるはずなのににもかかわらず、それを解明しようとすればするほど「生きづらさ」自体がカテゴリー化されてしまい、「生きづらさ」の枠からこぼれ落ちる「生きづらさ」が出てきたり、「生きづらさ」の多様性が見えにくくなったりするということだ。

専門分野に軸足を置くという行為は、対象を見る視角の固定化を伴う。これは、「生きづらさ」のある側面を見えなくさせる。また、専門分野に軸足を置くことは、「生きづらさ」探究活動及び「生きづらさ」理論に特定の方向性を与えるということでもある。したがって、学術研究者の一見「価値自由」と思えるような「生きづらさ」探究活動や「生きづらさ」理論も、その学術研究者の専門分野らしい政治的行為の一つであるということがわかる。

学術的言語で思考し、定義し、説明する（しなければならない、せざるをえない）という職業的使命は、日常語としての「生きづらさ」を学術語としての「生きづらさ」に翻訳するような作業である。学術語と日常語との差異¹⁹を考慮すれば、この下部構造のもとでは、学術語で考え表現される「生きづらさ」概念と日常語で考え表現される「生きづらさ」概念との間にズレが生じることが想定される。

加えて、学術研究者には、研究者として研究を続けていくために、また、生計を立てるために成果を出さなくてはならないという職業的側面がある。特に、「選択と集中」の資金を獲得するためには、ある程度の成果をわかりやすく発表することが必須である。また、専門家の知の優位性が感じられにくくなっているときには、デマなど誤った情報が流布しやすいために、専門家が正当な手続きを踏んだ言説を専門家らしくはっきりと訴えていくことの重要性

¹⁹ 宮原（1998）は、実際の体験・体感を通して身についた「カラダ語」と、勉強や読書、人からの伝聞を通して頭に入った「アタマ語」という違いを提起している。この言葉で表現すれば、学術語は「アタマ語」であり、日常語は「カラダ語」である。

が増す。この状況では、学術研究者にとっては、読み手の解釈しやすい事例や理論を優先して取り上げることが効率的であり、生産的である。この下部構造は、研究者に複雑な「生きづらさ」を探究することをためらわせる要因となる。

続いて、当事者研究に携わる専門家のように、「生きづらい」当事者と支援者・被支援者の関係を結ばないコーディネーターや伴走者といった専門家の場合を検討する。コーディネーターや伴走者は、助言・指導・援助を担う専門家に比べ、対話的・省察的・協同的であることに特徴を持つ。コーディネーターや伴走者は、技術的合理性を求めることに疑問を持ち、当事者との対話の中で当事者及び当事者の「生きづらさ」への理解を深めていくような「生きづらさ」探究活動を行うが、彼らにとって重要なことは、「生きづらい」当事者が自分の「生きづらさ」を理解し〈どうにかする〉²⁰ことができるようになることである。つまり、対話的・省察的・協同的であるコーディネーターや伴走者は、「生きづらい」人が自ら「答え」を探し求める過程を支えながら、専門家自身の知を何度も再構築している。したがって、コーディネーターや伴走者は、専門家主義に対抗するという文脈に位置付けられることができる。

コーディネーターや伴走者の関わる、「生きづらい」当事者が集い行う探究活動の多くは、「生きづらさ」を他者と共有することを通じて「生きづらさ」を〈どうにかする〉活動である。したがって、コーディネーターや伴走者の出会う人々は、「生きづらさ」を共有し他者と協同することに価値を置いている人々であり、「生きづらさ」を〈どうにかし〉ようと思っている人々だという傾向にあると考えられる²¹。そのため、他者との協同に価値をそれほど感じない人の「生きづらさ」や、他者に明かしたくない類の「生きづらさ」、〈どうにかし〉ようと思わない／思えない「生きづらさ」は、当事者の集う探究活動には現れにくいと考えられる。つまり、対話性・省察性・協同性という下部構造によって、それらのことに価値を感じない人の「生きづらさ」や、他者に明かせない「生きづらさ」、〈どうにかし〉ようと思わない／思えない「生きづらさ」が、コーディネーターや伴走者から見えにくくなる。

また、当事者が集い行う探究活動には、ある程度のエネルギーがあるという下部構造も見出せる。自身の「生きづらさ」に向き合うことや「生きづらさ」を取り巻く社会状況を「問題」とみなすこと、その変革に向け何らかの実践を行うことには、相当な気力や体力を要する。そのため、「生きづらさ」探究活動を行う当事者は、ある程度のエネルギーがある主体であろう。そのようなエネルギーのある当事者に関わるコーディネーターや伴走者にとっては、それらを行うエネルギーのない当事者並びにその「生きづらさ」は、人が自身の「生きづらさ」を中心として「生きづらさ」を考えるというごく自然な心性と相まって、見えにくくなる場合がある。

最後に、社会の「問題」の指摘や社会構造に関するクレーム申し立て活動を行う社会活動家や発信者といった専門家の場合を検討する。彼らは、個人の問題とみなされてきたものを

²⁰ ここでは、「生きづらさを解消する」「生きづらさを乗り越える」「生きづらさを克服する」「生きづらさから回復する」「生きづらさと付き合う」「生きづらさをしのぐ」「生きづらさに対抗する」「生きづらさを無視する」などを総じて、「『生きづらさ』を〈どうにかする〉」と表現する。

²¹ もちろん、当事者の集う探究活動の中にも、自己開示や「生きづらさ」を〈どうにかし〉ようとするものを要求しないと明言している場がある。しかし、その場の実際の空気が参加者にそれらを要求しないものであるかは別である。また、そもそも、そこに行くという時点で参加者は何らかの自己開示や〈どうにかする〉行為をいつかは行う覚悟にあると推測される。

社会の問題と捉え直すような機運の中で、明確な問題意識のもと巨視的な言説の提示や運動等の実践を明確な言葉で行うという職業的専門性を下部構造としている。

クレイム申し立ては、それを申し立てる人が「問題」の所在を自覚しているときに行なわれる。したがって、「生きづらさ」を生み出す既存の社会構造を改変することを目指す社会運動は、国家レベルの社会であれ、地域レベルの社会であれ、社会の「問題」をある程度明確に想定していると考えられる。明確な問題意識のもとで運動が特定のテーマ（例えば、貧困、性暴力など）を掲げながら「生きづらさ」という言葉を使うとき、そこでは種々の「生きづらさ」がそのテーマを軸に読み解かれる。これは、「生きづらい」当事者にとっては、自分の「生きづらさ」を理解し、似た「生きづらさ」を抱えている／感じている仲間と連帯し、「生きづらさ」を〈どうにかする〉ことに大いに役立つ。また、専門家にとっては、運動や理論化において主張を正当化するための然るべき方法になる。しかし同時に、この作業は、あらゆる「生きづらさ」話をすべてそのテーマに収束させていく、つまり、「生きづらさ」を見る視角を固定化させかねないという危険性も伴う。意識的であれ無意識的であれ、批判したいものを批判するためや既に念頭にある理論を補強するために「生きづらさ」像を構成・再構成することは、他者の「生きづらさ」を決めつけてしまうという行為にもなる。「生きづらさ」がその原因や内実を明確に自覚しないまま抱えられうるものであるがゆえに、専門家は、すべての人がそこで生きている「社会」というものを提示することで、「答え」を求める「生きづらい」人に対して「『生きづらさ』の原因はそれかもしれない」と思わせ、彼らの思考や行動を特定の方向に誘導することができる。社会的なテーマを掲げる専門家たちの下部構造が引き起こしかねないこの「生きづらさ」の解釈の強制のようなものは、「生きづらさ」ならではの曖昧さ、複雑さ、包括性といったものを捉えにくくする。また、テーマとのつながりがあるかないかが一見では分からないような「生きづらさ」を、視界に入れにくくする。

「生きづらさ」という言葉には、社会のありようの諸矛盾と同時に精神的な困難を表せるという多義性がある。したがって、社会活動家や発信者が「〇〇問題（例えば、貧困問題、格差問題、労働問題など）」「日常の違和感」「生活資源の不足」などの言葉に代わって「生きづらさ」という言葉を使うとき、制度や物質といった社会構造の欠陥に伴う個々人の精神的な困難さをも表現することができる。しかし、社会活動家や発信者が根本的な関心を社会構造に寄せ社会問題の指摘や社会運動を目指していること、言い換えれば、専門家が最終的に巨視的な言説や実践を担うという使命を負っていることで、結果として個々人の精神的な困難さが相対的に後景へ押しやられる。すなわち、社会構造に重きを置いた「生きづらさ」探究は、「生きづらさ」という言葉ならではの多義性を持ちうるにもかかわらず、活動が具体化するときにはその多義性が失われるのである。

社会運動に関わる者は、時に、それを行わない人からも、それを行う仲間からも、「生きづらさ」を主張することを抑圧されることがある。「その『生きづらさ』は自己責任だ」「もっとつらい人もいるのだから、その『生きづらさ』は大したことはない」という批判にさらされると、自分（たち）の「生きづらさ」は探究するに足らないもののように感じられ、探究活動に消極的になることが予想される。とりわけ、「障害者」「セクシュアルマイノリティ」「非正規雇用者」などという診断名・記号の付与されていない者の場合、自己の「生きづらさ」を合理的でないとみなし、「生きづらさ」を主張しにくいと予想される。この抑圧は、実際に自分（たち）が他者から批判されるか否かに関わらず、そのような雰囲気社会にあり、内面化されてい

る場合にも働く。したがって、自己責任とみなされやすい「生きづらさ」や取るに足らないとみなされやすい「生きづらさ」は、たとえ社会活動家や発信者がそれを包摂しようとしていたとしても、社会活動家や発信者の探究活動に反映されにくい。こうした抑圧状況は、社会活動家や発信者を含む様々な人々が「生きづらさ」について明確に問題設定し発信する（しなければならない）ことに大きく由来すると考えられる。ある「生きづらさ」をある「問題」として示す行為が、そこから零れ落ちる「生きづらさ」の主張を抑圧しうるのである。

4.1.2. 下部構造の維持・強化

第二に、専門家が「生きづらさ」探究活動を通じて社会からの要求に応えることによって、専門家の意図の有無に関わらず、その社会からの要求が維持・強化されていくこと。

例えば、支援者や臨床家がテグリーに共通の「答え」を示すことは、カテゴリーに即した「答え」に対する社会の期待を維持させることや高めることにつながる。

学術研究者が社会に関する診断や「答え」を発表していくことは、彼らの意図に関わらず、それを受け取る側による明確な「答え」の要求の継続に加担することにつながる。

コーディネーターや伴走者については、対話的・省察的・協同的な実践に携わることによって、対話や省察、協同といったものを重視するという下部構造が強固になると推察される。

社会活動家や発信者が分かりやすい表現で理論や運動を展開することは、社会活動家や発信者の役割がそのようなものであると多くの人々に認識させるきっかけとなるため、社会活動家や発信者に分かりやすい活動や発信を求める下部構造の強化につながる。

こうした下部構造の維持・強化は、4.1.1で論じた状況を再生産する。

4.1.3. 受け手との共鳴

第三に、仮に専門家が見えにくく認識されにくい「生きづらさ」を捉えたとしても、専門家の理論が受け手の下部構造に共鳴しないために広まらず、結果としてその「生きづらさ」が反映されていないように見えるということ。

支援者や臨床家が同じカテゴリーを持つ人にとっての「答え」を部分的であれ示すことは、探究によって得られた知を積み重ねられることもあって、探究活動としての意義を多くの人から支持されうる。他方、特定の個人に焦点を当てた探究成果は、他の人に援用することの難しさから、比較的広まりにくい。したがって、カテゴリーに共通するものとは言えない「生きづらさ」は、探究活動に反映されていないように見えやすい。

支援者や臨床家が個人の主観や体験といったミクロな話に焦点を当てた「生きづらさ」論を構築することは、被支援者たちと彼らに寄り添う人々にとっては、主観や体験を尊重されるという意味で、比較的受容しやすいものであると考えられる。その一方で、個人の問題とみなされてきたものを社会の問題と捉え直すことを重視する人々にとっては、社会構造への言及が相対的に少ないことから、満足できないものであろう。したがって、個人の問題とみなされてきたものを社会の問題と捉え直すような機運の中では、ミクロな話に焦点を当てた「生きづらさ」論は広まりにくいと考えられる。

学術研究者が生み出す理論は、研究者の間では比較的広まりやすいが、学術語に馴染みのない人々の間では、時として広まりにくい。換言すれば、学術研究者が非研究者には馴染みのない学術語で理論を構成した場合、その理論は日常語の世界では受け流されやすいと考え

られる。

コーディネーターや伴走者の生み出す理論は、人間解放やエンパワーメントということを経期的な視点に立って求められる人々からは歓迎されるが、「不安」に抗する知を差し迫って求める人々の間や、対話・省察・協同に価値を感じない人々にとっては頼りないものと感じられうる。したがって、「不安」に抗する知を求める社会・時代では、彼らの「生きづらさ」理論は広まりにくいと推察される。

コーディネーターや伴走者が対話的・省察的・協同的な価値観やエネルギーを持たない／持てない人々のことを参照できないままでは、彼らの関わる実践が特殊なものとなされることを強めかねない。卑近な言葉で表現すれば、コーディネーターや伴走者と彼らが関わる探究活動は、彼らと異なる下部構造を持つ人々から「意識高い系」とみなされ敬遠される可能性を孕んでいるということである。このように遠ざけられれば、彼らの理論も広まりにくい。

社会活動家や発信者の生み出す理論や運動は、似た問題意識や「生きづらさ」を抱えている／感じている人々の間では広まりやすいが、そうでない人々の間では広まりにくい。

こうした中で、大勢の人々の下部構造に共鳴しない「生きづらさ」理論は広まらないため、ある「生きづらさ」が、例えそこで取り上げられていたとしても、理論が表に出てこない結果として反映されていないように見えることがある。

以上のように、ゲールドナーの下部構造論を用いれば、専門家による「生きづらさ」探究活動に一部の「生きづらさ」が反映されない構造の一端を説明することが可能となる。

4.2. Rational Discourse論の援用

4.2.1. 知的対話と限界の自覚

ゲールドナーのRational Discourse論に従えば、現代の「生きづらさ」探究活動を行う専門家について、次のことが仮説的に示される。それは、専門家の「生きづらさ」論はその専門家の下部構造によって制限されているが、様々な下部構造を持つ専門家どうしが知的対話を行うことで、「生きづらさ」の全体的な理解に今よりも近づける、というものである²²。

このことについて、何よりも、異なった下部構造を持つ者どうしの知的対話が実現すれば見える範囲が広がるということは単純にうなずけるものである。ゲールドナーは『『経験主義的』諸学問の批判的適用・統合』という言い方をしていたが、「生きづらさ」を探究する専門家がCCDを身に付けていると仮定すれば、学問分野の垣根を超えた対話だけでなく、学術研究や現場実践、社会運動の垣根を超えた対話も可能であり、有益である。このようにして視野の広がった専門家が多角的に知を構築していくことは、専門家の下部構造としての環境をも変化させる。すなわち、専門家とその専門領域における専門家として求められてきた知をより多様性を内包するものにしていくことで、専門家に次に求められる知のありようがより多様性に富むものとなると考えられるのである。また、各専門家が「生きづらさ」を探究する際の枠組みや探究成果の還元先の設定を取り払うことで、全く新しい知が得られると

²² あくまでも「生きづらさ」の全体的な理解に今よりも近づけるということであり、「生きづらさ」の全体を理解できるということではないことに留意すべきである。

いうことも考えられる。その際、成果主義という下部構造が障壁となるだろう。しかしそれも、様々な下部構造を持つ専門家どうしが協働していれば、すぐに役に立つと思えないものが別の視点や長期的視点に立てば役に立つということを示しやすくなることで、乗り越えることができるかと期待される。

知的対話は、自己省察を促すという点で特に意義を持つものであった。グールドナーの自己反省の社会学に従えば、「生きづらさ」探究活動についても専門家自身が己の下部構造を省察することが重要であるが、伝統的権威の非参照及び自発的な同意を重視するもとでは、自身の拠って立つ足場は省察しにくい。ここで、グールドナーが非権威的理性を重視し、rationalityの孕む矛盾や限界に自覚を持ったrationalityを追求していたことを思い出せば、専門家の下部構造の自己省察も、省察の限界やrationalityの限界をどれほど自覚できるかにかかっていると言える。その避けられない限界を自覚しつつも乗り越えようとし続けるときに、知的対話による刺激が有効である。これは特に、共感やエンパワメント、協同といった現代的な「rationality」に「生きづらさ」理解が狭められる側面を乗り越えようとするときに効果的だと考えられる。

異なった下部構造を持つ者どうしの知的対話を実現するための条件としてグールドナーが挙げたことは、「安全な場」という表現でまとめることができよう。self-groundnessな言語様式という要点、すなわち、伝統的権威の非参照及び自発的な同意という要点は、現代的には、ハラスメントに怯えたり後援者に付度したりすることなしに専門家が対話を行えることと読み替えることができる。相対的に高いレベルの教養を持つ隣接した仲間の会話という要点は、見当違いな方向からの攻撃を受けて傷ついたりそれへの対処に労力を割いたりすることなく対話を行えることと読み替えることができる。ただし、ここで考慮しなければならないのは、後者の要点が、専門家主義を助長し専門家の権威主義性を高める危険性を持っているように見えることである。CCDを身に付けた専門家を至高とみなし、それを身に付けていない人を「無知」と捉え対話から排除することは、それを身に付けていない人々の存在や彼らに関する事象を軽視するということにつながりかねない。そうしたCCDの権益化と専門家の権威主義性の高まりはまた、CCDを身に付ける専門家に共通した一定の下部構造を省察できなくし、結果として「生きづらさ」の探究も妨げる。このことに関連して、グールドナーの記述で注目すべきは、知的活動の世俗化によってCCDの担い手が大量生産されるという部分である。これに即して考えれば、CCDの担い手を既存の専門家以外にも増やしていけると考えられる²³。事実、当事者研究によって批判的な思考回路が開かれCCDを身に付ける非専門家がいる。ブログやTwitterは、非・知的な側面も多分にあるが、それによって誰かに何かを伝えようと試行錯誤する中で文脈に依存しないCCDを身に付ける非専門家もいる。これは、知的対話の「仲間」が専門家に限定されないことを暗示する。先に、様々な下部構造を持つ専門家どうしが知的対話を行うことで「生きづらさ」の全体的な理解に近づけるということを仮説的に示したが、その知的対話は非専門家を完全に排除するものではないということである。こうしたことは、高いレベルの教養を持つ隣接した仲間の会話という要点と、CCDを身に付けた専門家の権威主義性への批判を、矛盾しないものとして在らしめる。

²³ CCDの担い手の拡大には現実的な困難もある。しかし、ここで重要なことは、グールドナーの理論が理念としてCCDの担い手を専門家に限定していないという点である。

以上のように、ゲールドナーのRational Discourse論は、様々な下部構造を持つ専門家どうしが知的対話を行い自身のrationalityの限界を自覚しながら自己省察を続けることで「生きづらさ」理解の幅が広がることを示唆している。

4.2.2. 非権威的理性と明識としての知

非権威的理性と明識としての知への志向も、現代の専門家にとって有意義な視座である。

専門家が診断名・記号に即して「生きづらさ」を探究する行為は、4.1で見たように、カテゴリー内の多様性や個人の「生きづらさ」の全体像を理解しにくくなるという欠点や、診断名・記号の付与されていない人を包摂しにくいという欠点を持っていた。これらの欠点は、ゲールドナーのRational Discourse論の言葉を使えば、専門家が諸事実を秩序立て解釈し支配しようとする権威的理性のもとで「生きづらさ」についての情報としての知を構築していることに由来すると言える。したがって、権威的理性と情報としての知ではなく非権威的理性と明識としての知を志向するならば、これらの欠点を補うことができると考えられる。

非権威的理性と明識としての知を求めることは、過度な「専門家主義」を乗り越えることにもつながると考えられる。ゲールドナーの非権威的理性と明識としての知という観点に立てば、専門家による診断名・記号は、所与のものではなく専門家の下部構造に応じて見出されるものである。伝達可能な知は、あくまで情報としての知のみである。これらのことは、専門家の言葉が絶対的なただ一つの「答え」ではなく、また、「答え」の本質でもないということ、そして、専門家による援助行為は専門家自身の明識としての知を体現しているものだということを意味する。この点で、非権威的理性と明識としての知を志向することは、専門家による診断名・記号の付与を過剰に要求する下部構造を乗り越えるものとなる。

明識としての知は、ただ対象についての情報を説明できることだけではなく、自分との関係性の中で対象を捉えたりそれによって自己が変容したりと、深い意味で対象を理解していることを意味し、それでこそ物事の全体性・複雑さをつかみ描写できるというものである。こうした志向のもとでは、「生きづらさ」を探究する専門家は、個人と社会を分断しないで「生きづらさ」を捉えやすくなるだろう。そのような探究活動と知を専門家が示し続ければ、人々も、「問題」に出くわしたときに、「私」とその「問題」との関係性という一点で「問題」を捉えるのではなく、その「問題」と別な誰かと別な「問題」との関係性も視野に入れられるような、いわば「問題」のネットワーク化という下部構造をつくっていくこともできると想像される。こうした下部構造は、専門家に、そこにある対象自体だけでなく、そこにあるものと他のものとの関係性を知ることが可能にさせ、さらには、そこにはないものについて思いを馳せることも可能にさせる。この意味で、草柳（2004）の言う「そこにはないもの、あるべきもの、あってよいはずのもの、についての、分析者・観察者の『知識』」は、情報としての知ではなく、明識としての知であろう。明識としての知を求めることは、専門家による「生きづらさ」探究の範囲の広まりや認識の深まりを可能にすると考えられる。

非権威的理性のもとで明識としての知を求める行為は、早急に「答え」を示すことや、はっきりとした「答え」を示すことをしない。対象をむやみに秩序立てて理解することや知を情報として伝達することに立ち止まる。これは、「生きづらさ」の理解を急がないことの大切さを示唆している。「生きづらさ」を探究する専門家には、対象を理解しコントロールする「答え」や明確な成果、分かりやすさが切望される社会という時代的下部構造がある。しかし、

もしも専門家自身が非権威的理性のもとで明識としての知を尊重していくことができたなら、「答え」を急がない社会をつくることができ、ある「生きづらさ」を見えにくくさせている下部構造を変容させていくことができると考えられる。

明識としての知は、人が自分自身で獲得しなければならないものである。そのため、専門家が「生きづらさ」に関する明識としての知を発信する行為は、幾人かの読み手に対して各々が下部構造を共鳴させ明識としての知を得ることを待つという行為となる。専門家が「真の生きづらさ」なるものや「生きづらさの本質」なるものを措定せずに、また、「生きづらさ」へ対処する営為そのものを具体的に説明することをせずに、なるべく曖昧なまま提示することで、受け手が受け手自身の下部構造を通じて解釈し知を構築する余地を与えるということだ。もちろん、このような仕方では提示される言葉にも専門家の下部構造は反映される。それでも、専門家が「生きづらさ」を直接的に提示するときよりは多くの「何か」を含むことができ、「生きづらさ」という言葉の多義性、複雑さ、曖昧さを、わずかながらでも、より活かせると考えられる。

以上のように、グールドナーのRational Discourse論は、非権威的理性と明識としての知を重視することで、「生きづらさ」探究の範囲を広げたり認識を深めたりすることや、ある「生きづらさ」を見えにくく認識しづらくさせている下部構造を変容させることが可能となるということを示唆している。

4.2.3. Rational Discourse論援用の課題

以上で見てきたことは、グールドナーのRational Discourse論が「生きづらさ」探究活動の検討に援用される価値のあるものだということを示唆する。しかし、Rational Discourse論には課題も存在する。

4.2.1では、「生きづらさ」探究活動における、様々な下部構造を持つCCDの担い手による知的対話の有効性と条件を確認した。また、その知的対話に参加できるCCDの担い手は非専門家からも生まれうるということを確認した。しかし、そうは言っても、CCDとは異なる「文化」を持つ人々は存在する。例えば、言語理解と言語表現に障害や苦手さのある人や、CCDに価値を感じない人を挙げることができる。そのような人々のことを蚊帳の外に置くことは、倫理的にも許容できないし、知の多様性を損なうことになる。この部分について、グールドナーのRational Discourse論を援用しても考察しきることができなかった。

4.2.2では、非権威的理性と明識としての知を志向することの意義を確認した。しかし、非権威的理性と明識としての知を志向し続けることは、簡単なことではない。G. W. オルポート (1961=1968, 引用部傍点は原文ママ) は、「われわれは、生きるために自分の知覚を単純化しなければならないし、安定させる必要がある。同時に、われわれは、どん欲なまでに説明を求めている」と言い、「過度のカテゴリー化は、おそらく、人間の心のもっともありふれたトリックであろう」と述べる。人は情報としての知を求める生き物であり、物事を単純化しなければ苦しむ、「権威的理性」の持ち主なのである。その困難の中で、専門家が自己を洞察に開き物事の全体性を捉えようとし続けることがいかにして可能となるのかということを、グールドナーを引くだけでは十分考察しきれなかった。

したがって、「生きづらさ」を探究する専門家のありようを考察するときには、Rational Discourse論を乗り越えた展望も不可欠となる。

5. 結論

5.1. 結論

ここまで検討してきたことをまとめると、本論文の結論は以下のようになる。

専門家による「生きづらさ」探究活動に一部の「生きづらさ」しか反映されないという現象の構造は、専門家の下部構造への着目、つまり、専門家とそれを取り巻く社会や人々との間の相互作用の検討を通じて、説明されうる。この意味で、グールドナーの下部構造論は、「生きづらさ」探究活動の現状を読み解く際の手がかりとして有効である。

下部構造は人を規定するが、それは人によって変容可能なものであり、その変容を考えるときにはRational Discourse論が有益な部分もある。換言すれば、グールドナーのRational Discourse論は、専門家が今よりも少しでも多くの「生きづらさ」を探究活動に拘い取られるようにすること、そして、我々が「生きづらさ」を包括性や多義性のある言葉として使い続けられるようにすることの一助となる。しかし、Rational Discourse論には不足点もある。したがって、専門家による「生きづらさ」探究活動には一部の「生きづらさ」しか反映されないという現象の改善を求める際には、グールドナー理論だけでは限界があり、グールドナー理論を超えた展望も不可欠である。

5.2. 今後の展望

専門家による「生きづらさ」探究活動に一部の「生きづらさ」しか反映されないという現象の改善を求める際のグールドナー理論を超えた展望を、以下に簡単に述べる。

まず、CCDとは異なる「文化」の人々に対する注目の不足という問題である。これについて、本論文では参照することができなかったが、英語圏の学者たちによって検討がなされてきているようである。『社会学の再生を求めて』に解説を寄せている高橋徹（社会学者）は、社会主義社会学者のフラックスや批判理論家のシュロイヤーの論考を引き、Rational Discourseという基本線だけは保持しながらもコミュニティへの参加基盤はできるだけ非専門家世界にまで拡大するという構想が提起されていると記している（同書, p. 258）。したがって、この問題については、グールドナー理論の批判的検討を行っている英語圏の理論家の知見を整理することが、残された課題の一つとなる。

次に、非権威的理性と明識としての知を志向し続けることの困難を乗り越える方法の未検討という問題である。この問題を考えるときには、差し当たり、Negative Capabilityという概念を導入することが有効だと思われる。Negative Capabilityとは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」や「性急に証明や理由を求めず、不確実さや不思議さ、懐疑の中にいることができる能力」を指して使われている概念である（帯木蓬生, 作家・精神科医, 2017）が、元々は詩人であるJ. キーツが「真実」を掴むための姿勢を論じたときに生み出した言葉である²⁴。Negative Capabilityの性質は、物事を秩序立てて配置することに抗するものであること、また、自己を開き様々なものを受け入れることによって対象の全体性を把握することが特徴であり、グールドナーの言う「非権威的理性」と「明識と

²⁴ Negative Capabilityという概念の概要及び日本におけるNegative Capability研究の動向は、筆者の修士論文の補注に整理した。

しての知」の志向と似ていると考えられる。また、「生きづらさ」を探究し続けるエネルギーや、その前段階の、そこにとどまるエネルギーとも似ている。加えて、込み入ったすべてをそのまま経験するNegative Capabilityは、言語の枠を超えて対象に思いを及ぼせるものでもある。これらのことから、専門家のNegative Capabilityをいかに保つかという検討が、非権威的理性と明識としての知を志向し続けることの困難を乗り越える方法の検討と重なるということがわかる。したがって、キーツの示した『『真実』を掴む』という点に立ち返りながらNegative Capability研究を発展させ、その知見を「生きづらさ」を探究する専門家のありようと併せて検討していくことが、今後の課題の一つである。

【付記】

本論文は、筆者が北海道大学大学院教育学院に提出した令和2年度修士論文を基に執筆したものである。

引用文献

- Allport, G. W. (1961) *The nature of prejudice*. Addison-wesley publishing company, Inc., Cambridge. (原谷達夫・野村昭訳『偏見の心理』培風館, 1968.)
- 馬場明男 (1972) 「七〇年代の社会学の課題と展望 ―グールドナーの「西欧社会学の到来しつつある危機」を中心として―」, 『社会学論叢』55, pp.78-93.
- 土井隆義 (2009) 『キャラ化する／される子どもたち―排除型社会における新たな人間像』岩波書店.
- Gouldner, A. W. (1955) Metaphysical pathos and the theory of bureaucracy, *The American Political Science Review*, 49(2), pp. 496-507. (岡本秀昭・塩原勉訳「形而上パトスと官僚制理論」, 『産業における官僚制』, pp. 303-324. 経済雑誌ダイヤモンド社, 1963.)
- Gouldner, A. W. (1965) *Enter Plato: Classical Greece and the origins of social theory*. Basic Books, Inc., United States.
- Gouldner, A. W. (1970) *The coming crisis of Western sociology*. Basic Books, Inc., New York. (岡田直之・田中義久ほか訳『社会学の再生を求めて』全3巻 新曜社, 1974-1975.)
- Gouldner, A. W. (1973) *For sociology: Renewal and critique in sociology today*. Penguin Books Ltd., Harmondsworth. (村井忠政訳『社会学のために(上) 現代社会学の再生と批判』杉山書店, 1987.)
- Gouldner, A. W. (1976) *The dialectic of ideology and technology: The origins, grammar, and future of ideology*. The Seabury Press, Inc.
- Gouldner, A. W. (1979) *The future of intellectuals and the rise of the new class*. The Seabury Press, Inc. New York. (原田達訳『知の資本論: 知識人の未来と新しい階級』新曜社, 1988.)
- 帯木蓬生 (2017) 『ネガティブ・ケイパビリティ: 答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版.
- 神原文子 (2011) 「「生きづらさ」を社会学するとは ―ひとり親家族を事例として―」, 『現代の社会病理』26, pp.7-26.
- 貴戸理恵 (2014) 「「生きづらさ」の増殖をどう考えるか ―みんなが「当事者」になる時代」, 『福祉労働』(142), pp. 22-29.
- 草柳千早 (2004) 『『曖昧な生きづらさ』と社会: クレーム申し立ての社会学』世界思想社
- 宮原浩二郎 (1988) 「リフレクシヴ・プロジェクト: A. W. グールドナー再考」, 『関西学院大学社会学部紀要』(57), pp. 25-44.
- 宮原浩二郎 (1998) 『ことばの臨床社会学』ナカニシヤ出版.
- 毛利嘉孝 (2009) 『ストリートの思想: 転換期としての1990年代』日本放送出版協会.

- 中野秀一郎 (1988)「機能主義: 一九五〇年以降の機能主義社会学について」,『現代アメリカの社会学理論』恒星社厚生閣 (新睦人・三沢謙一編) pp. 25-73.
- 小沢牧子 (2003)『「心の専門家」はいらない』洋泉社.
- 柳原佳子 (1988)「自己反省の社会学: A. W. グールドナーの道化劇」,『現代アメリカの社会学理論』恒星社厚生閣 (新睦人・三沢謙一編) pp. 265-301.
- 保田卓 (1999)「社会学者の立場 —マンハイム, グールドナー, ルーマン—」,『京都大学大学院教育学研究科紀要』(45), pp. 57-66, 京都大学大学院教育学研究科.
- 矢沢修次郎 (1979)「グールドナーの「自己反省の社会学」」,『現代社会学』6 (1), pp. 3-19.

Effectiveness of Theories by A. W. Gouldner in Examination of Inquiries into “*Ikizurasa*”

Natsuki FUJIKAWA

Key Words

Gouldner, infrastructure, Rational Discourse, *ikizurasa*, specialists

Abstract

In Japan, the word “*ikizurasa*” is used by various people as a comprehensive and ambiguous word. “*Ikizurasa*” is a Japanese compound word of “*ikiru*” and “*tsurasa*”. The former means “to live”, “to be”, “to survive”, “to exist”, “to experience”, etc. The latter adds the meaning “difficult”, “hard”, and “painful” to the former. As the meaning of the word “*ikizurasa*” is comprehensive and ambiguous, anyone can use the word to explain one’s state.

Currently, many specialists are attempting to understand “*ikizurasa*”, as well as defining the word, constructing theories, and presenting ways to overcome “*ikizurasa*”. Although the word is comprehensive and ambiguous, there are some “*ikizurasa*” that are not reflected by such attempts. This phenomenon has the following problems. (1) Some could be confused by the difference between the published “*ikizurasa*” and their own interpretation of “*ikizurasa*”. It may deprive someone of the word which explains their state. (2) By relying solely on a specific framework, it may make someone difficult to recognize or solve their “*ikizurasa*”. If we are to overcome this phenomenon, we need to know the structure of this phenomenon. When considering the discussions on this topic, theories by A. W. Gouldner could be worth to use. Therefore, this study examines the significance and limitations of using Gouldner’s theory in the discussions.

As a result of overviewing and organizing Gouldner’s theory, it became clear that the structure of the above-mentioned phenomenon can be explained by using Gouldner’s “infrastructure” theory. In other words, we can explain how this phenomenon occurs by examining the interaction between the specialists and their surrounding people/society. It also became clear that Gouldner’s “Rational Discourse” theory, especially “dialogue”, “consciousness of limitations”, “non-authoritative reason”, and “awareness” can aid specialists to pick up more “*ikizurasa*” in their works. This allows for us to continue using the word “*ikizurasa*” as a comprehensive and ambiguous word. However, it also became clear that we cannot overcome the phenomenon using only Gouldner’s theory.